

1 研究主題

英語で思いや考えを伝え合う児童・生徒の育成
～言語活動を中心に据えた授業実践を通して～

2 はじめに

新学習指導要領以降、小学校での英語の教科化や中学校での学習内容の増加に対応するために、会員の授業力向上や小・中学校のさらなる連携が求められるようになった。小牧市英語教育研究会では、数年来、小・中学校の円滑な接続を目指し、授業での言語活動の内容、指導方法等について検討してきた。

現在、本会では英語で思いや考えを伝え合う児童・生徒の育成を目指している。特にコミュニケーションの媒体としての英語を、児童・生徒同士の関わりを大切にしながら学ばせることを主眼において研究を行ってきた。今年度、上記研究主題に関連し、授業実践についての情報交換や小・中学校の連携を主な活動として研究に取り組んだ。

3 研究経過

研究主題に沿って、各会員の勤務校において各校の現状を踏まえた実践・研究を進めた。また、それぞれの研究会の時には、会員が目的ごとに班を編成し、協議を行った。

- 第1回 令和6年4月23日…………… 研究テーマ発表、研究主任・副主任選出
- 第2回 令和6年5月14日…………… 情報交換と授業実践報告①
- 第3回 令和6年6月11日…………… 小中連携について①
- 第4回 令和6年7月9日…………… 小中連携について②
- 第5回 令和6年9月10日…………… 小中連携について③
- 第6回 令和6年10月8日…………… 情報交換と授業実践報告②
- 第7回 令和6年11月12日…………… 有効な言語活動について①
- 第8回 令和7年1月14日…………… 有効な言語活動について②
- 第9回 令和7年2月4日…………… 令和6年度のまとめ

4 研究の概要

(1)情報交換と授業実践報告

会員を小学校班と中学校班に分け、中学校班はさらに所属学年別に分かれ、情報・意見交換を2度行った。また、異校種、異学年を混合した班を編成し、授業実践報告を行った。

情報交換や授業実践報告では、言語活動において指導者が意識すること、ALTとのチーム・ティーチングのあり方、ふり返りの評価のあり方などについて、各校の情報を交換するとともに、よりよい方法のための意見交流を行った。

(2)小中連携について

今年度より研究主題を新たにし、小・中学校それぞれの言語活動のあり方、指導と評価の実情を知ることや、よりよい授業や教材についての理解を深めることをねらいとして、小中連携についての研究を行った。連携の一環として、①小学校の授業動画視聴、②中学校の授業体験、の2つを行った。今回は、②について特筆していく。

②中学校授業体験「see/sees」(一般動詞三人称単数現在形導入)

会員を対象に中学校英語の授業を体験してもらう取り組みを行った。内容は、中学校1年生の一般動詞の三人称単数現在形を GDM(Graded Direct Method)という教授法を用い、導入したものである。会員は生徒役となり、教師役の中学校教員が通常の授業形式で進化した。

この取り組みの目的は、小学校勤務の会員が中学校でどのような授業が行われているのかを知り、今後の指導に生かしていくことにある。特に小学校から中学校への学びの橋渡しとして、英語教育の連続性や指導法の違いを実感してもらうことを目指した。以下は、振り返りの一部抜粋である。

- ・今回の授業を受けて、自分の授業を変えていく必要があるのかなと思いました。
- ・「ねらい」、「手段」の大切さが伝わりました。
- ・英語の授業は、テンポが大切だということを改めて感じました。
- ・英語で話す場面が多く、同じことが何度も出てくるので、この時間のどこかで追いつけば何とかかなと思え、あきらめずについていこうと思えるのではないかと思います。
- ・初めて GDM の授業を体験して、とても楽しく学ぶことができました。教えられるのではなく、生徒自身が気づき、学ぶことができる点がとてもいいなと思いました。小中連携を推進するにあたって、中学校の授業を知ることができ、とても参考になりました。

実際の授業を体験することで、文法指導の具体的な方法や、中学校の授業で求められる教師の英語力についての理解が深まり、小学校英語教育の改善や指導法の工夫に繋がることが今後期待される。

5 今後の課題

主に小中連携を中心に、小・中学校の教員が互いの授業や言語活動を知ることや情報交換をすることで、校種を超えて、よりよい英語教育のあり方を共に考えられる機会が得られた。一方で、依然として「中1ギャップ」への対応が課題として残っている。小中連携の仕組みや手立てが整いつつある一方で、小学校で英語に対して苦手意識をもっている児童は、中学校に進学しても授業での苦労が続いている状況がみられる。また、異なる校種における英語の指導法や指導と評価のあり方に関する教員間の理解は、まだ十分に深まっていない。今後も、こうした課題に取り組むために、教員同士の意見交換や具体的な事例を基にした協議を継続し、より実用性のある小中連携の強化を図っていく必要がある。